

みなさんは、何を軽米らしさにあげますか？

昔きゅうり、店頭 の炭火で魚を焼く風景、今はないあの街角の建物・・・などなど

「赤レンガの蓄熱性」

『NHK で北海道のレンガの家に住んでいる人の特集を見たわ。レンガって蓄熱性がすごい高いから、木の家と比べものにならないくらい暖かいんだってよ』

それは先日、近所の人との会話です。僕は家のレンガ倉庫を掃除したらとても広くなったので、内作をして住んじゃおうかと冗談で言ったのですが、まさか実現したらきっと素晴らしいと賛成されるとは…。その後数日、いやがうえにも夢がふくらみましました。

倉庫の間取が頭から離れないまま仕事をしていたある日、福祉の作業所に勤めるTさんが閉店間際に僕の店に来てくれました。心なくしては続けることの難しいその職種と、遅い帰宅時間に頭が下がり、ご苦労様ですと言いました。大変なことはありません、それよりも何か子供たちにさせる簡単な手仕事はないものではないかと問われたのです。



僕がハッと気づいてTさんに差し出した色紙が上の写真。誰から頂いたかはもうさだかではないのですが、確か北海道の道徳研究家、ナントカ馬吉先生が文字を書き、知的障害を持つ子供たちがボール紙に赤い台紙と金帯を張った色紙です。

使い古された文字がこんなにも深く、強く胸を撃つ。この世に生を受けたいのちの一つひとつを大切に思う人としてのこころ、おそらくは子供たちがとても苦労して作ったであろう色紙、それがどういった経路で僕の手元に届いたか、その色紙を見るたびに不思議な縁にまでこうべを垂れてしまうのです。

「赤レンガ軽米が注目されて観光地化されていけば、お土産品が必要になります。そのときには

お願いにあがりますから、どうぞ参考にしてください」。色紙をTさんに差し出しながら、なんと僕は思うより先にその言葉を口にしていました。

家路に向かうTさんを見送って、年の瀬の寒空を見上げました。「やられたなあ…」Tさんの情熱が僕に蓄熱してしまったのかもしれない。「知足」そうです、とりあえず住むに足る家があるのだから、あの赤レンガ倉庫は、我が身と家族をあたためるよりも軽米の人たちの心をあたためるために使ったら、もっとあったかくなるはずですよ。

Tさんに渡した色紙には「至誠」の2文字。はたしてこれからどんな人の手に渡り、どれだけの人のこころをあたためるのでしょうか。

そう、蓄熱といえば、冒頭の会話のつづき。『その北海道のレンガの家に住む人はね、冬は2日と家を空けないそうよ。だってね、レンガの家っていちど冷えきったらもとの温度に戻るのがすごい大変なんだってサ…』

なんとも啓示的と申しますか…。まずは皆様、軽米の町をあたためるため、今年も切れ目のないご協力の程、よろしくお願い申し上げます。（団員K）

軽米らしさ探偵団とは？

1999年10月の豪雨災害後の河川改修の会議で軽米らしさは何かと聞かれて即答できなかったことがきっかけとなり、軽米らしさを見つけ、地域資源を活かした魅力あるまちづくりを進めようと設立されたグループです。

軽米には赤煉瓦の建造物としては珍しい戦後に造られた建物が20棟ほどあることに注目して旧大黒醤油工場を改装し「まちかど煉瓦館」を開館したほか、ライトアップ、レンガ建造物の回りの花壇づくり等を行っています。

今年度は、財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団、NPO法人カシオペア連邦地域づくりサポーターズの地域づくり助成金を受け活動をすすめています。